

タオル

今治タオル—やさしい心を織りこんで—

阿部 克行

愛媛産には、愛がある。



今治タオルの創始者・阿部平助の胸像

今治出身の絵本作家である長野ヒデ子氏が「私とタオル」と題するエッセーの中で、タオルへの想いを、つぎのようなきれいな言葉でもって綴っている。

「いまは、自然と人間とのかわり合いを見つめなおしている時代。生まれたばかりの、はち切れんばかりに輝いている赤ちゃんを、最初に抱むのがタオルであることに感動しています。生まれて一番最初に出会う布、それがタオルなのです」

感性豊かな女性ならではの、新しい視点からタオルを見つ

めなおした美しい文章だ。こんなにちの生活環境は、生産者側、使用者側ともに、発想の転換が求められている時であることは間違いない。

それをタオル業界に則していえば、従来の「身体を拭くもの」という固定されたイメージを捨て、マフラー・バスローブ・カーテン・シャツ等の分野に素材提供も含めて研究開発の目が向けられ、その中からすでにヒット商品も生まれている。

技術畑の出身でありながら、同時に豊かな感性を身につけている某メーカーの社長は、

える。

その起因は二つあった。一つは消費者不在の商品企画、もう一つはタオルを「物」としか見なかったことにあったと思う。

「物としてしか見ない」ということはどういう意味かというと、「売れたらそれでおしまい」という利益至上主義の感覚のことをいう。換言すると、



いまばりタオルのイメージポスター
(作者・長野ヒデ子氏)

より数えて、六十年目に達成した快挙だった。その間には、麓常三郎や中村忠左衛門らによる織機の改良や、紋織り技術の独創など、他産地に先駆けての熱意あふれる開発努力があった。

「四国・今治地方には、自分のものを人の為にさり気なく差し出す気風、風土、伝統が根付いている。そんな風土だからこそ、タオル文化が根を張り、大樹になったのではないだろうかと、タオル産地として今治の特色をそう説明する。

「今治タオル」は、昭和三十五年（一九六〇）に質量ともに大阪・泉州地区を凌駕して、念願の日本一の座を確立した。明治二十七年（一八九四）、機業家だった阿部平助が、この地にタオルの種子を蒔いた年



東京銀座のタオルブティック [IMABARI TOWEL BOUTIQUE]



四国タオル工業組合の事務局がある「テクスポート」



「タオル美術館」(朝倉村)

タオルを消耗品としてしか考えていなかったということである。

この十年ほど前から、タオル業界も中国をはじめ、他のアジア諸国からの輸入攻勢を受け、国内市場を席巻されつづけている。今治産地も抜本的——というより革新的な意識改革を行わなければ、タオル産地として消滅する危機に瀕している。

激烈な国際競争の中で勝ち残っていくためには、日本の文化や、地域の特性を商品企画の中に強く出していけないと消費者に受け入れてもらえないことを若い経営者たちは気付きはじめていたのである。

ついこの前まで、今治はタオルの集産地としては世界一を誇っていたのである。それは他地域にはない特色、今治ならではの特長がはつきりとあったからに他ならない。

高縄山系を水源とする天然の軟水は、染色技術をハイレベルに向上させたし、また村上水軍の血をひく旺盛果敢な

気質、地理的には九州と大阪とを結ぶ海路のちょうど中間地点に位置する利便さ、そうした様々な条件が輻輳して、タオル産業が興隆したのである。

こんにちは「癒し系」の商品が人気を博している。消費者動向は「物」を買うより、「心」を買うという時代に入っている。

タオルも、そうした流れを受けて今治人の心を買ってもらう時代に入っているといえるだろう。その事はとりもなおさず今治の文化をお客さんに認めてもらうということである。

文化とはその町の「匂い」である。産地の匂いがしない商品は顧客の満足が得られない。

幕末期に日本へやってきたヨーロッパ人たちは、初めて目にした瀬戸内海の景観に驚いたという。「わが地中海と驚いども、これほど美しくはない」と感嘆したと紀行文にある。

ヨーロッパの後期印象派の画家たちも、こぞって日本の浮世絵に激しいショックを受け、とくにゴッホは「日本に行きたい。日本人になりたい。地中海とそっくりな瀬戸内海に住んでみたい」と、何度も弟に手紙を書いて送っている。

そうした世界的景勝地に抱きこまれ、穏やかな気候と豊かな人情に育まれた今治の地は、ソフト・イメージが生命のタオル生産に最も適した環境にあるといえよう。

「イマバリ・タオル」の機能性と文化性を再び世界の国の人たちに知ってもらうため、若い経営者たちは日夜努力している。

今年ニューヨーク市で開催された「ホーム・テキスタイルショー」では二社のタオル会社が大賞を獲得し、高い評価を受けた。

また、先年オープンした「タオル美術館」や「タオルガーデン」も話題をまわしている。本年の三月に東京の銀座でオープンした、[IMABARI

TOWEL BOUTIQUE」は、日本一のタオル産地・今治を東京でアピールするとともに、大消費地東京の消費者ニーズを把握し、より高品質の商品開発のための情報収集基地としての役割を果たして快調なすべり出しを見せている。

瀬戸内の風土で育った今治人の、やさしい心によって織り出されていくタオル製品。へふしぎといいね。」

タオル組合が長野ビデ子氏に依頼して作ったキャッチ・コピーを最後に紹介して、この稿の締めくくりとしたい。

あべ・かつゆき 昭和十八年今治市生まれ。平成元年より創作活動に入る。県生涯学習推進講師。今治市立図書館「文楽実践教室」講師。市民文芸誌「こんどび」代表者。平成十二年、今治市より「教育文化功労者」として表彰を受ける。

・主な著書
「黎明期の今治を創った人たち」「首倡功」「大橋を夢見た男たち」「迷宮の刃」など。